

原島 則夫

一 レポートの概要

1 アイヌ民族・先住民族をめぐる教育課題

↳ アイヌ民族大学の創設を

清水裕二・少数民族懇談会会長

清水氏は、なぜ「アイヌ民族大学」を求めるとして、一般的に「アイヌ問題」と表現されるが、「アイヌ民族の歴史・文化・現状に関する課題」「アイヌに関する問題」と表現されるべきもの。そして奪われた権利を回復する課題・問題即ち解決しなければならぬ事柄と説明。なお解決のため学校教育の充実には欠かせない課題であるが現状では、①地域社会の認識は、先住民・アイヌ民族の存在や権利について、気にする・考える習慣はない。気にしてほしいが、アイヌの人権や概念を考える習慣は少ない。一般市民は、民族差別は解消していると認識し、当事者は、差別を恐れ「私はアイヌだ」と表明できない現状が

ある、と述べた。

学校教育の現状は、教科書の記述は不十分であり、補完する副読本も、当局による書き換え問題が発生。教員免許取得時にも、アイヌ民族の歴史・文化に関することは不問にされている問題がある。

2 北大アイヌ人骨問題を考える『さまよえる遺骨たち』

清水 裕二・少数民族懇談会会長

清水氏は2本目のレポートで、北大がアイヌ墓地から掘り出(盗掘)した1049体の人骨を保管していることは、古い問題ではなく現在においても進行している人権を侵害する問題であると指摘。その遺骨にかかわって3名の遺族が2012年2月、北大に懇談を申し入れたが北大は警備員を動員し門前払いという対応をとった。北大の仕打ちに対して遺骨の返還を求めて裁判を提訴せざるをえなかった経緯を最初に述べた。

次いで遺骨問題の歴史的背景として、

①大学にアイヌ人骨がなぜあるのか、

②幕末から明治・大正・昭和の学術調査(アイヌ墓地盗掘)略年表、

③発掘に対する社会の反応

——を示した後、遺骨をめぐる返還交渉として、ウタリ協会が人骨の返還と慰霊を求めた結果、一部の支部に「無縁仏」とし

て返還し、残る人骨を「アイヌ人骨納骨堂」を建立(1984年)し納め、協会主催で毎年供養を行うが返還は実施されていないと述べた。

清水氏は、残された課題として、

①これにかかわる研究者はこの問題にどう向き合うのか。

②北大が3月27日に発表した「北大医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」は不誠実。3遺骨は、遺族に返還すべき

——として、北大だけでなく、この問題にかかわる人に考えてほしいと述べ、北大に対して、調査報告書、遺骨の返還、現在行われている裁判などへの誠実な対応を求めた。

### 3 『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容』

(北海道アイヌ民族生活実態調査報告その2) から考える

原島 則夫・ほっかい新報

『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容』は、インタビュ法による調査を実施(調査対象—札幌60人、むかわ60人)し、結果をまとめたもの。

民族意識の項では、アイヌの固有の民族意識は、世代が下がるに従って希薄に、若い世代ではアイヌ民族を特別視する政策に否定的な傾向。農漁村、女性の方が、権利回復政策要望が多い。また女性の方が、民族の権利回復などの一般的理想的な項

目ではなく、子どもの教育費の援助など具体的な事柄を要望。アイヌ文化への関わり方では、違いが存在する。若い人の中には、アイヌと知らされた時、「カッコいい」ととらえる感性をもつ者さえいる。

エスニックな社会運動への参加と意識について検討した項では、協会への参加は、経済的な側面で大きな意味。とりわけ、教育に関する事業のメリットが大きく認識。「協会」の事業に対しては、懐疑的な意見。教育に関する事業制度そのものを活用しない者がいた。

今回の調査結果からうかがいあがったのは、アイヌ文化に携わることを通して、アイヌであることに對する負のイメージを払拭し、アイヌとしてのアイデンティティを肯定的に受けとめ直す人々が生み出されていたこと。

学び直すことによつて、アイヌ文化の担い手として自らの主体が(再)形成されていく過程。その主体のあり方は、文化だけにとどまらず自らの社会的な立場を向上させるうえで重要な担い手を生み出す可能性をはらんでいる。

報告は、アイヌ文化の価値が見直されることは、アイヌ自身の中に変化をもたらすだけではない。和人自身のアイヌに対するイメージを変化させることにもつながると考えてよい——とも記す。

## 4 北海道アイヌ協会と私

栗原 きよ子

栗原氏は長年、ウタリ協会〇〇支部の会員として会費も納入し、行事や儀式にも参加するなどアイヌ民族の一員として活動してきた。ところが、転居を機に支部ニュースや行事の案内などが届かなくなった。連絡すると、「入会手続きが必要」という。支部の役員(当時)にこの次第を伝えたら、大丈夫……と言われ安心していった。その後もニュース等届かない。支部ではあくまでも一度退会した事になっている、として「アイヌであることを証明する証をつけて入会手続きをするように」という。アイヌ協会はいったい誰のためにある組織なのかと、疑問をなげかけた。

## 5 「アイヌ遺骨返還請求訴訟」

フリーランス記者・平田 剛士

平田氏は、北大を相手に起こされた「アイヌ遺骨返還請求訴訟」の公判を毎回傍聴し、「アイヌ遺骨返還請求訴訟ニュースレター」を出し、原告の主張と北大の対応などを知らせる作業をつづけている。原告、弁護士の見解陳述の全文や要旨、北大の不誠実な態度についても紹介している。その様子を映像をつかって報告。

## 6 ジャッカ・ドフニ閉館と今後の課題の進行状況

映像作家・藤野 知明

映像作家の藤野氏も昨年引き続き、ジャッカ・ドフニ閉館と今後の課題の進行状況を報告——13年10月4、5日に北方民族資料館ジャッカ・ドフニが解体され、収藏品は北海道立北方民族博物館(網走市)に移された。ウイルタ協会の活動、使命は今後も継続する。ホームページを開設し、インターネット上でジャッカ・ドフニを「開設」し、日本語、英語、ロシア語で情報を発信していく方法を検討している——と報告。

## 一一 討論から

- ・ 大学はつくりやすいのでは？民族大学をつくる運動をすすめていくことで可能性はあると思う。
- ・ アイヌ民族大学には反対するものはないと思うが、大学で学んだことを活かせる仕事が確保される必要がある。
- ・ 象徴空間構想に対して、私たちの側でも構想・提案を出していくことが大事、本当は昨年度中に出せればよかったが。
- ・ アイヌ民族という言葉をつかって、生徒の中には具体化できない。権利を持った集団としてイメージを描くことができないう問題もある。

・アイヌに関することに関心を持ってほしい。  
・分科会の参加者が少ないのはもったいない。いま起きている問題をとりあげて理解を深める教材をつくることができるのではないか。遺骨返還訴訟などは中学生に分かつてもらえる内容のものを工夫したい——という積極的な発言があり、それぞれがそのために努力をしようとは確認した。

(ほっかい新報社)